

サマーキャンプを通して小児糖尿病患児の指導について考える

2階東病棟

○恒石 ひとみ 宮井 千恵

はじめに

小児の糖尿病は、そのほとんどがインスリンの絶対的欠乏であり、生涯インスリンの補充を必要とするためインスリン依存性糖尿病と呼ばれている。

インスリン依存性糖尿病の治療は、①インスリン療法、②食事療法、③運動療法、④患者及び家族の教育、の4つが基本となっている。

すでに全国各地で糖尿病患児の教育と指導を目的としてサマーキャンプが行なわれ効果をあげている。本県においても、今回初めて愛媛県との合同で、第5回西四国小児糖尿病サマーキャンプを行なった。その概要報告と、キャンプを通して考察した小児糖尿病患児の指導について報告する。

I 小児糖尿病サマーキャンプの目的

キャンプの目的は、良いコントロールを維持し、健康な小児たちと変わらない生活を送り、正常な発達をとげ、社会の中で十分自分の能力を発揮できるよう自信をもたせることである。一般にキャンプでは、主に次のようなことが教育されている。

- 1) 糖尿病とは何か、糖尿病の歴史、インスリンの歴史について
- 2) インスリンの注射法
- 3) 衛生材料の作り方、及び取扱い
- 4) 尿の検査法
- 5) 食事療法のやり方、運動する時の補食について
- 6) 低血糖時の知識と対策
- 7) インスリン注射をやめるとどうなるか
- 8) 糖尿病合併症がなぜおこるか
- 9) 糖尿病患者に適した職業、適さない職業
- 10) 糖尿病患者の結婚と出産について

II 第5回西四国小児糖尿病サマーキャンプの概要について

1. 期間と場所

昭和59年8月8日から8月12日までの5日間、国立室戸少年自然の家で行なわれた。

2. 参加者及びスタッフについて

小児糖尿病患者24名、うち男児9名（7～19才）、女児15名（7才～19才）であった。スタッフは延人数、医師11名、看護婦12名、栄養士13名、ボランティア4名であった。

3. キャンプのスケジュールは表に示す通りである。

第5回 西四国小児糖尿病サマーキャンプスケジュール表

時	8/8	8/9	8/10	8/11	8/12
6		起床. 洗面 →	→	→	→
		検尿. インスリン注射 →	→	→	→
7		朝のつどい →	→	→	→
		朝食. 清掃 →	→	→	→
8					
9	国鉄松山駅出発	講義及び上級生の体験 談	体験乗船	講義 (上級生. 下級生) 医学. 栄養. 生活一般	反省とまとめ会 退所行事 退所
10	↓				↓
11		検尿 →	→	→	
12		昼食 →	→	→	
13	医大出発	野外活動 (追跡ハイキング)	海水浴	感想文 奉仕活動 キャンプファイヤー 準備	医大 ↓ 松山へ
14	↓				
15	入所				
16	オリエンテーション. 結成式 検尿. インスリン注射				
17		検尿. インスリン注射 →	→	→	
		夕べのつどい →	→	→	
18	夕食. 入浴	夕食. 入浴 →	→	→	
19	計画説明	映画及び討論	キャンプファイヤーの 話し合い	キャンプファイヤー	
20					
21	就寝準備 →	→	→	→	入浴
	検尿 →	→	→	→	
22	消灯 →	→	→	→	
23	スタッフミーティング →	→	→	→	

4. 看護婦の参加目的

- 1) 糖尿病患児と生活をともにする中で、患児の自己管理の方法を指導し確認していく。
- 2) 集団生活の中で、看護の役割を認識し、チームメンバーとしての役割を果たす。
- 3) 糖尿病患児の日常生活を知り、臨床看護の中に生かす。

5. 看護婦の担当した主な業務について

1) 医療スタッフとしての業務

- (1) 薬品、衛生材料、救急物品等の準備とキャンプ中の管理
- (2) 救急処置
- (3) 夜間の患者観察
- (4) 患者、スタッフの健康管理

2) 患者の教育、生活指導について

- (1) 受持ち患者制をとり、生活指導を中心にして、援助を行う。
- (2) インスリン注射の指導
- (3) 尿、血糖検査の指導
- (4) 受持ち患者の記録
- (5) 講義

3) キャンプの構成メンバーとしての行事参加

6. 結果及び考察

1) 医療スタッフとしての業務について

- (1) 薬品、衛生材料等の物品の準備については、キャンプ中、発熱等の原因で輸液を必要とした患児が5名も出たため、輸液類が不足し補充を行なった。輸液類の種類は多く準備してあったが限られたものを使用する機会が多かったため次回は医師と検討が必要である。
- (2) 夜間の患者観察は、医師1名、看護婦2名で当直制とし、血糖測定、観察、救急処置を行った。夜間に痙攣をおこした患児もあり、業務はハードであったが、絶対必要であり、また役割も果たせたと思う。

2) 患者の教育、生活指導について

- (1) 受持ち患者制をとり、1名の看護婦が3～4名の患児を受持ち、一日の状態を把握し記録してゆき、スタッフミーティング時に報告し検討した。また看護婦独自では、前もって看護計画用紙を作成し、患児一人一人の情報、問題点と、キャンプでの目標を記入しておき、キャンプ中にその目標が達成できるよう援助を行った。その結果、自分でカロリー計算の出来なかった患児も栄養士の指導により可能となり、インスリンの自己注射も集団の中で自信をつけた患児もあった。今回、看護婦1名につき、受持ち患者4名であり、業務内容から考えてこの程度が妥当である。
- (2) 生活指導に関しては、参加患児の年齢が7才～19才と差があったため年長児には年少児の世話をある程度まかせ、リーダーシップを養成する必要があると考え、それぞれの役割を持たせたが十分とは言えなかった。今後、年長児で自己管理のほぼ実施出来ている者には、スタッフミーティングに参加させるなどの方法で自覚を高めてゆくことも必要である。
- (3) 講義は、上級生グループと下級生グループに分け、医学、栄養、生活一般について行われ、看護婦は生活一般を担当した。全体として、2つのグループに分けて行ったことは効果的であったと思われる。

以上のように、キャンプにおいて、いくつかの問題も残されたが、子供たちにとっては何よりも、キャンプの中でなければ得られない糖尿病患児同志の交流や、スタッフとの交流が各行事を通して十分に行われたことは、最も大きな成果であったと思う。しかし、キャンプ途中でホームシックになり一時自宅へ帰った患児1名、体調が悪く療養中の病院へ入院した患児1名、他、キャンプ中に発熱等をおこした患児が数名あり、検討すべき点も多かった。

看護婦の参加目的について考察すると、受持ち患者、当直等で、一日24時間勤務であり、自由時間は皆無と言える程であったが、それぞれが役割を十分果し、参加目的を達成できた。また、一人一人の看護婦が疾病の理解を深め、病児としてではなく、生活の中での患児を再認識することができた。さらに、キャンプに参加した多くの職種の中で、看護婦の果す役割を認識し患児への指導のあり方を体得できた事も大きな収穫であり、今後の臨床看護の中に反映できるものと確信する。

Ⅲ おわりに

5日間のキャンプを通して、糖尿病患児同志の交流がはかれたことはもちろんであるが、医学的にも、インスリン量の変更が必要であったり、摂取カロリー等、検討を要する者もあり、今までのコントロールの方法を見直すという点で意義があったと思われる。

今回は、高知県において初めてのキャンプであり、スタッフ全員が初参加であったため、愛媛県のスタッフの皆様大変お世話になった。次回は、愛媛県で開催される予定であり今回の経験を生かして、成果のあるキャンプにしたいと考えている。

キャンプに参加した子供たちが、キャンプで得たことを日常生活の中で十分に生かして、良いコントロールを続けてくれることを期待している。

参考文献

- 1) 特集, 小児糖尿病: 小児看護, 3 (6), 1980.
- 2) 特集, 小児の糖尿病: 内科, 45巻5号, 1980.
- 3) 特別企画糖尿病: からだの科学, 117, 1984, 5.
- 4) シリーズ: ナーシングプロセス=小児糖尿病患児の看護, クリニカルスタディ, 84-6, VoL 5, No 6, P 16~32.

(昭和60年3月16日 高知市にて開催の日本看護協会高知県支部昭和60年度
看護研究学会にて発表)